

インタビュー調査に基づく大学生のボランティア活動の参加・継続要因の分析

関西大学大学院 学生会員 〇田近 柊
元関西大学 非会員 川村柊太
関西大学 正会員 尾崎 平

1. 結論

日本の生物多様性は劣化しており、NP0 等が主催する生物多様性の保全活動においてボランティアが果たす役割は大きい。一方で、10 代、20 代の学生においてはボランティア活動に関心があるものの行動には至っていない人が多い。大学生を含むこの年代に働きかけることで環境保全活動の推進につながると考えられる。そこで、大学生がボランティア活動の参加に至るきっかけとボランティアの継続理由を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

(1) インタビュー調査の概要

インタビュー調査の概要を表 - 1 に示す。インタビュー調査は関西大学のボランティアセンターの学生を対象として、質問を投げかけて回答を得る形式で進行了した。

(2) テキスト分析

インタビュー調査結果の分析はテキストマイニングソフトである KH Coder3.BETA.07¹⁾を用いた。また、

形態素分析には MeCab0.90²⁾を使用した。

a) テキストの前処理

インタビュー調査結果をテキストマイニングにより分析するために、テキストデータの作成とクリーニングを行った。インタビュー調査によって得られた音声の逐語録を質問に対する返答ごとに分割し、236 個のテキストデータを作成した。作成したテキストデータのクリーニングの手順を図 - 1 に示す。分析の対象とするきっかけ、継続に分類されたテキストデータ数はきっかけが 64 個、継続が 26 個となった。

b) きっかけ、継続の要因分析

きっかけ、継続の構成要素の抽出はネットワーク分析手法のサブグラフ特定手法を用いることでネットワークの構造的に結びつきの強いキーワード構造を特定し主要な話題の要約を行うという木村ら³⁾の抽出方法で行った。共起ネットワークの作成は集計単位を文で行い、語の出現数が 5 回以上かつ 2 文以上で出現した語を対象として行う。本研究では Jaccard 係数を用いて共起関係の分析を行う。Jaccard 係数を 0.2 以上としたときに共起ネットワークにおけるノード数が少なくなってしまうため、0.1 以上を関連があるとした。また、共起ネットワークの煩雑さを回避するために最小スパニングツリーのみを描画した。

3. 結果

きっかけに関するテキストデータの最小スパニング

表 1 インタビュー調査の概要			
対象者概要			
日程	学年・人数	学部・性別	
2022/11/30	大学2年生 4名	環境都市工学部	男性
		システム理工学部	男性
		社会学部	女性
		政策創造学部	女性
2022/12/01	大学1年生 4名	法学部	男性
		法学部	女性
		商学部	女性
		社会学部	男性
2022/12/02	大学3年生 2名	商学部	女性
		法学部	女性
インタビュー実施概要			
使用時間	進行内容		
15分	アイスブレイク 既往の研究・調査の紹介		
40分	ボランティア活動に参加したきっかけ 活動参加についての促進要因,阻害要因 ボランティア活動の継続理由		
15分	意思決定プロセスについて 内容の振り返り		
5分	お礼の言葉,学生からの質問		

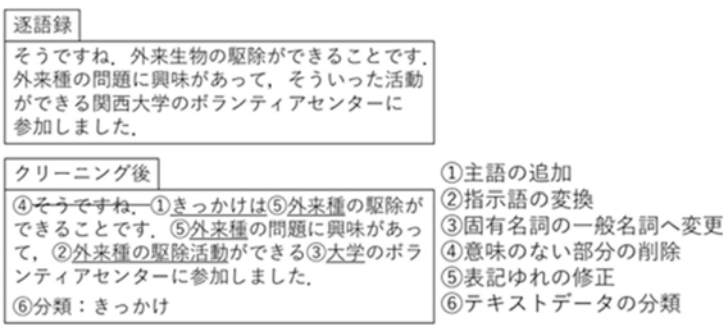


図 1 テキストのクリーニング手順

キーワード インタビュー調査、共起ネットワーク、テキストマイニング
連絡先 〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学大学院 田近柊 06-6368-1121

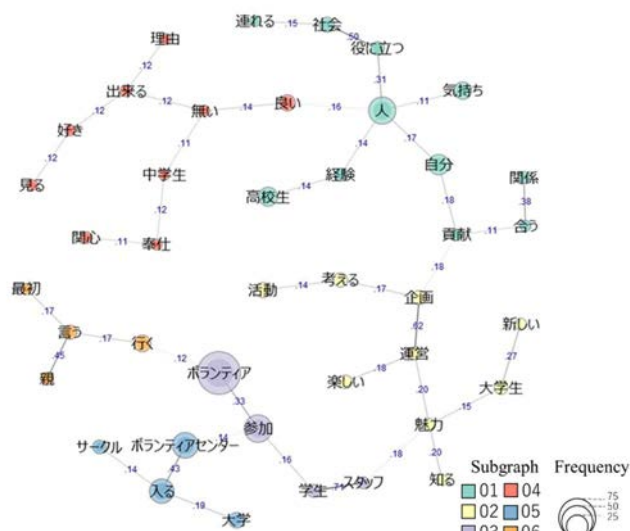


図 2 きっかけの共起ネットワーク

ツリーのみを描画した共起ネットワークを図-2に示す。サブグラフ1は「人」や「社会」「高校生」「経験」「役に立つ」「貢献」などの語からなり、「人や社会の役に立ちたい気持ち、高校生のときの経験」に関する話題である。「人」についての発言では、「人の役に立ちたい」という発言や「人との出会いがある」という発言が見られた。また、人や社会の役に立ちたいという思いは漠然としたもので、特定の環境問題や社会問題を解決したいというものではなかった。サブグラフ2は「企画」や「運営」「大学生」「考える」「新しい」などの語からなり、「運営や企画を考えること、大学生から新しいこと」に関する話題である。「運営や企画を考える」では、「企画や運営をやりたい」という発言や「企画力がつけられることが将来的に自分のためになる」という発言が見られ、ボランティア活動にかかわることの便益についての発言が見られた。「大学生から新しいこと」では、「大学入学を転機に何か新しいことがしたいと思い、ボランティアを始めた」という発言が見られた。サブグラフ6は「親」や「言う」「行く」「最初」からなり、「最初は親に言われたから行った」という話題である。ボランティア活動の参加のきっかけとして、親による後押しがあることが考えられる。

継続に関するテキストデータの最小スパンニングツリーのみを描画した共起ネットワークを図-3に示す。サブグラフ1は「ボランティア」や「参加」「活動」「自分」「違う」という語からなり、「参加したボランティア活動が違った」という話題である。「違う」では「ボランティアに参加したけど、思っていたのと違って辞めた

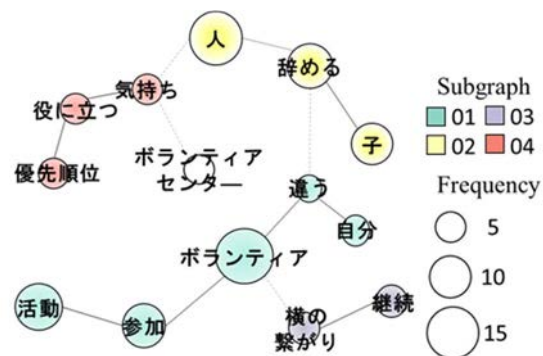


図 3 継続の共起ネットワーク

子がいた」という発言が見られ、継続につながらなかった理由として想像していたボランティアと実際のボランティアの間にギャップがあったことが考えられる。サブグラフ3は「横の繋がり」や「継続」からなる。横の繋がりにはボランティアサークルにおける交友関係のことを言っており、学生スタッフ同士が仲良くなることで活動に参加しやすくなると考える。サブグラフ4は「優先順位」や「役に立つ」「気持ち」という語からなり、「役に立ちたい気持ちの優先順位」についての話題である。継続している人は人や社会の役に立ちたい気持ちが強くボランティアの優先順位が高い。

4. まとめ

本研究では以下の結論が得られた。

- きっかけを構成する要素としてボランティア活動を通して自身のスキルアップや人との出会いといったボランティアに参加することによる便益や過去の経験から形成された人の役に立ちたいという利他心、大学に入学して新しいことを始めたかったという挑戦心、親の後押しがあった。
- 継続の促進要素は人や社会の役に立ちたいという利他心の強さや所属団体の人間関係の形成が考えられる。一方で、継続の阻害要素は考えていたボランティアとのギャップや大学生活の中での時間・優先順位等があった。

謝辞：本研究は関西大学 先端科学技術推進機構 気候変動に適応した健康まちづくり研究グループの助成を得て行った。

参考文献

- 1) KH Coder, <http://khc.sourceforge.net/>, 最終閲覧日 2023 年 3 月 28 日
- 2) McCab, <https://taku910.github.io/mecab/>, 最終閲覧日 2023 年 3 月 28 日
- 3) 木村道徳, 河瀬玲奈, 金再奎, 岩見麻子, 馬場健司: 行政による質的な意識調査を通じた気候変動影響の把握手法の検討と滋賀県での実践, 環境科学会誌, Vol. 35, No. 4, pp. 213-226, 2022.